

令和6年度(2024年度)の曾根沼における魚介類の生息状況

山本充孝・大植伸之・孝橋賢一

1. 目的

外来魚駆除のモデル水域として選定した曾根沼（滋賀県彦根市）では、2003年度から外来魚駆除を実施しており、近年ではオオクチバス（以下、バス）が減少し、それに伴って在来魚介類（魚類とエビ類）が顕著に増加している。本年度も外来魚駆除を継続しつつ在来魚介類の生息状況調査を実施した。

2. 方法

2024年度の曾根沼では、4月2日に電気ショッカーボートによるバス駆除を実施したほか、小型定置網（全長約15m、目合い5mm）による在来魚介類およびバス当歳魚の生息状況調査を実施した。ショッカーボートで駆除されたバスのうち標準体長190mm以上の個体を親魚とみなしてその数を記録した。また、小型定置網での調査では5～7月および10月の各月中旬に網を一昼夜設置して取り上げ、捕獲魚種と各々の尾数を記録した。これら調査で得られた捕獲効率（CPUE：通電1時間または1操業あたりの捕獲尾数）を過年度と比較した。

3. 結果

バス親魚のCPUEは昨年度より減少し、最低水準であった2014～2018年と同程度であった（図1）。小型定置網でのバス当歳魚のCPUEは調査開始以来、初めて捕獲数がゼロとなったことから（図2）、2024年は繁殖が全く行われなかったのかもしれない。

これらの結果からバスの生息状況は引き続き低位であると考えられる。

一方、小型定置網での在来魚介類の確認種数は2023年の16種から11種（アユ、オイカワ、ウキゴリ等が小型定置網調査では未確認）に減少した。また、CPUEは2020～2022年の

水準より減少したが（図3）、この減少はスジエビとテナガエビの減少が大きく影響した。曾根沼はバスの生息量が低水準に保たれることで在来魚介類にとって良好な状態が維持されていると考えられるが、近年の在来魚介類の減少については、2023年以降ヒシが繁茂しなくなっていることとの関連が考えられるが、因果関係は現時点では明確ではない。

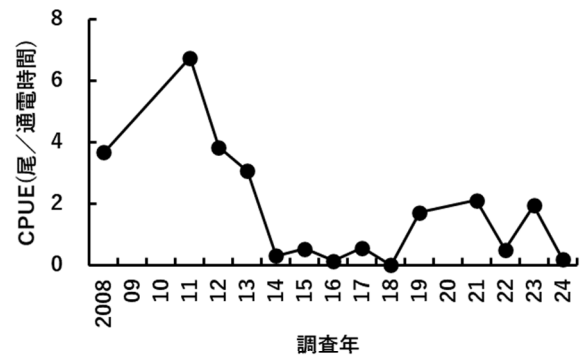


図1 電気ショッカーボートで駆除されたバス親魚のCPUEの経年変化

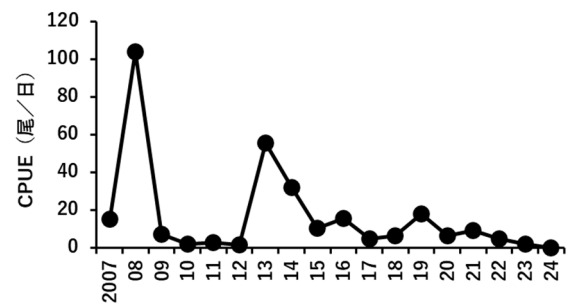


図2 小型定置網でのバス当歳魚のCPUEの経年変化

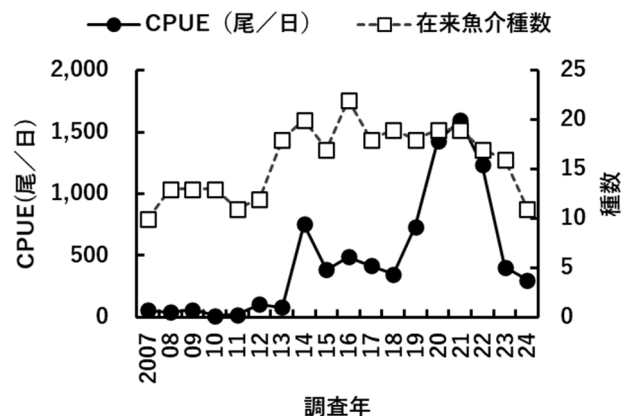


図3 小型定置網での在来魚介類のCPUEと捕獲種数の経年変化